

経世済民と理財

成城大学 教授 村本 孜

個人的なことでは恐縮だが、この3月で大学を定年で卒業する。経済学を本格的に学び始めて半世紀になる。経済成長理論華やかかなりし頃から、ラディカル・エコノミクス、オープンマクロ経済学、情報経済学、複雑系・進化経済学、行動経済学等考えることは多かった。理論展開が基本ではあるが、それをいかに現実の経済に落とし込んで考えるかが、興味の対象でもあった。イギリスの経済理論の碩学であるヒックスは「理論と歴史の一致」という命題を後年述べたが（『経済史の理論』1969年）、大いに共感した。金融論という応用経済学を専門にしたのもその考えからでもある。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というのは、ドイツの宰相ビスマルクの言葉というが、経済学も歴史を基盤にして物語ることが多い。ドイツ歴史学派はまさにそれを体現していた。大学の講義で経済史・西洋経済史・日本経済史・東洋経済史などの科目が並んでいる。

ところで、昨年もノーベル賞の受賞で日本中が湧いたが、「物理学は自然科学の王」といわれるように、モノ作り日本のアイデンティティを象徴するからであろう。これに対して、「経済学は社会科学の女王」と呼ばれる。19世紀半ばのイギリスの経済学者の貨幣論で有名なマクラウド、H.D.の言葉ともいうが、マクラウドは学部時代の講義で聴いた名前である。

「経済」というのは英語のeconomyの訳語で、はじめてその意味に用いたのは神田孝平訳の『西洋経済小学』（1867年）という。ただ、明治20年代までは同じ意味の語である「理財」（財をおさめる）が使用され、東京帝国大学では「理財学」が用いられ、明治26年に「経済学」に改称されたという（興膳宏「漢字コトバ散策」日本経済新聞2005年4月24日）。理財という表現は、財務省の理財局にそのネーミングを残すのみである。イギリスのケンブリッジ大

学でも経済学の講座は歴史と道徳科学の課程に置かれており、独立した学科になったのは1903年のことで、有名なマーシャルの尽力によるものであった。

「経済」というのは、中国では「経世済民」ないし「経国済民」で「世（国）を治め、民を救う」ことをいう。我が国では江戸時代には政治政策の意味で使われ、次第に経済運営に使われるようになったとされる。economyの訳語になったのは明治期になってからという。経済学の父であるアダム・スミスは社会を経済・法・倫理（道徳）の3側面から理解し、経済では利己心self-interestを経済活動の基本に置き、倫理では他者に対する思い遣りsympathyを置いた。「経世済民」で救うべき民とはsympathyの対象になる民であろう。経済的弱者といっても良い。スミスもself-interestで経済が市場を通じて予定調和に至ることを重視したが、治安・治水・司法そして弱者に対する対応は政府の役割と考えていた。

数年前にこの欄で“*One for all, all for one.*”について書いた。その精神は他者への配慮であった。経済学はまさにその実現を図るものであろうというのが、ここ半世紀で学んだことでもある。昨年来のブームとなっているラグビーでは、この言葉がもっとも大切とされる。トライをしたプレイヤーはもとより、その者にパスを出したプレイヤーが、そしてパスに至るタックルをした者が等しく賞賛されるというのがラグビーの精神であり、共感を呼ぶのであろう。さらに、ノーサイドの精神はその究極の姿である。マーシャルは「経済騎士道」という言葉を好んだが、ノブレス・オブリージ、メセナなどが喧伝されるのは、経済的成功者に求められる規範だからであろう。スミスの時代から変わらぬ他者への配慮である。弱者を忘れない「経世済民」の学であってほしいと学部での最後の講義で話した。